

# 山と博物館

第42巻 第2号 1997年2月25日

大町山岳博物館



フランツヨゼフヘーエ展望台から見たパステルツェ氷河

アルプスナンバーワン 沢 弥生

ヨーロッパのオーストリアは、アルプス山系の一國で大陸のほぼ中央に位置する。特に南部に仰ぐアルプス連峰はグロースグロックナーが主峰で国内の最高峰(三七九八メートル)。広い地域にわたって万年雪と氷におおわれ、このアルプスから源を発しているドナウ川は西から東を貫流し、国内延長三五〇キロメートルに及んでいる。

自然の美しさを背景とした国で、多くの芸術家が住み優れた作品が生まれ、一三世紀から今世紀初頭までの約七〇〇年間にわたって統治したハプスブルク家の君主たちは例外なく狩猟を好み、アルプスの森林に出かけたり山登りにも興じた。

王朝の発展を遂げたのは一五世紀後半にマキシミリアン一世即位以来のことであり、四方を山々に囲まれたインスブルックは以後彼の施策の中心となる貴重な都市となった。王はこの美しい山間の都市をとりわけ愛し、湖で魚つりをしたりカモシカ猟を好んだ。何よりも当地の山系から産出される銀・銅・塩のためだった。そこから上がる収益は莫大で、年間百万グルデンは下らない収益をもたらし、やがてマキシミリアンの軍隊の経費として用いられることになった。ハプスブルク家はもともと小貴族の出身にすぎなかったが、恵まれた自然と結婚政策が大成功を取めたことは有名で子孫代々、脈々と君主の地位をアルプスの岩のよう

に継承し続けてきた。

実質的には最後の皇帝に着いたフランツヨゼフは一八三〇年生まれ、あざやかな容姿の秀でた貴公子も少年時代から猟や乗馬、登山に熱中した。東アルプス最大の氷河パステルツェは長さ一〇キロメートル、面積三〇平方キロメートルでグロースグロックナーに白く輝いている。このすぐ近くにかつて皇帝が徒歩で到達したフランツヨゼフヘーエ展望台があり、付近の草地には愛くるしいアルプスマーモットが遊んでいる。現在は一九三五年より五年の歳月をかけて完成したグロースグロックナー山岳道路が通じ、アルプスナンバーワンの絶景で世界の人々が一度は訪れて見たいところとなっている。

(オーストリア国公認ガイド)

# 黒部に生きて(一)

曾根原 文平

はじめに

大町市在住の曾根原文平さん(八十二歳)は、大正四年、屋号「カクヨ」の五男として生まれ、旧制大町中学校を卒業後、野戦銃砲第九連隊を経て満鉄(旧南満州鉄道株式会社)へ入社しました。終戦を満州で迎え、故郷大町へ引揚げたのは昭和二十一年十月のことでした。敗戦、失意の日々。そんな折、兄に誘われて鹿島川で初めてイワナを釣ったことがきっかけでイワナ専門の職漁の道を進むことになりました。

これは平成九年一月二十一日に大町山岳博物館においてお話しいただいた内容を編集した、黒部最後の職漁者の記録です。

山河あり:

戦争が終わったのは昭和二十年の八月だけでも、大町に帰ってきたのは十月だったです。大町には生まれた家がある、跡をとって兄貴がおつたで、そこへ転がり込んだんです。百姓やっとなら米もあつたもんで、一応はそこで居食はできたわけです。普通の家だったから家族が増えたら大変な時代だったですよ。その点は割合と恵まれておつたわけです。

それでもね自分で自分の生活はしていかなくやならんわけですよ。ところが、あの時は混乱して、何も仕事がないんですよ。だから米持って、都会へ行けばなんぼか儲かるよ。いわゆるヤミ屋だよね。まあそんなようなこともやっただけど、結局儲からないんですよ。子供も二人連れとつたし、いろいろハンディがあつて、体一つで稼いでいけるわけがなかった。今考えると半分はもう終戦のショックで、どうでもいいっていうヤケな気



曾根原 文平さん

持があつたじゃないですか。私の二番目の兄は小間物とか、釣りに具なんの店を大町の八日町に出して、もちろん釣りも好きだったんだがね、そんな私を見かねたと思うんですが「魚釣りがいいか」と言ってくれて、鹿島川へイワナ釣りに行ったのが始まりなんです。

職漁こと始め

生まれたのは大町だから、中学生時代に魚釣った覚えはあるんですよ。その時分にマスやサケの系統だと思ふんだがね、私にはアメウオって呼んでたがヤマメみたいな魚、それが農具川じゃ釣れたんです。それでもイワナ釣るってことは知らなかった。

兄貴から道具をもらってね、竿や毛バリね。その毛バリを浮かべて釣るんだ。そうすつと下から魚が飛び上がってきてそれをくわえるからそこで釣れと教わって、二十二年の七月だったか、鹿島川の大谷原から大冷沢の方

に入った。魚もいたが、淵ってものは普通ね、ただつ立つて毛バリ投げ込んで出てこないんですよ。向こうが人間の姿見してしまえば、絶対出ないんですよ。ところがね、当時の魚は二度も三度も飛びつくんだよ、下から来て。おつ、これはおもしろいもんだなあと、初めてでもね、また出りやせんかまた出りやせんかと、三十分もね一時間もその淵動かないでやつた。兄貴が釣り上つて、一時間経つても私が出来ないから、戻って来た。「おまえ同じ淵にいたってダメだ、いっぺん出て釣り損なつたら、こすくなつて(警戒して)釣れないから、別なところに行つてやるんだ」と教わってね、そうやってイワナ釣りを覚えた。

結局他にやることもなかったし、頭冷やすのにね、谷川の瀬音を聞いたり、空気を吸ったり、景色を見たりしているのがよかつたですよ。それで病みつきになって、大谷原まで毎日歩いて釣りに行つたですよ。バカなもんでね、猫鼻(ひね)り(現爺ヶ岳スキー場近く)の鹿島川でも、いくらでも釣れたんですけども、やっぱり教わつた所しかわからんから、いつもそこへ行つたんですよ。

そうこうやっていっているうちにだんだんとコツを覚えてきて、二匹三匹釣るようになって、持って来て焼いて食つておつたんです。それを兄が見かねて、「おまえ、釣つて来て食つてたつてしょうがないから、えらい釣れるようになったで売つたらどうだ」ところが、満州ではサラリーマンだったからね、大町で魚を売ることになると、まあ料理屋ですけれどね、「イワナ釣ってきたが買ってくれんか」なんてなかなか言えないんですよ。これはサラリーマンの素性ですよ。

それで、「どいって売りやいいだ」と兄貴に聞いたら、今は無くなってしまった神楽町の「寿美よし」に、もと親戚筋の店で働いていた料理人がいて兄貴達と顔なじみだったから「話しとくで、持っていけよ」と言われ

て寿美よしに行つたんですよ。ところがね、何にも知らないから女関から入つて行って「イワナ釣ってきたがいらんかね」。出てきた女将さんに笑われましたよ。普通物売りは勝手口から入るってことも知らなかつたんですよ。

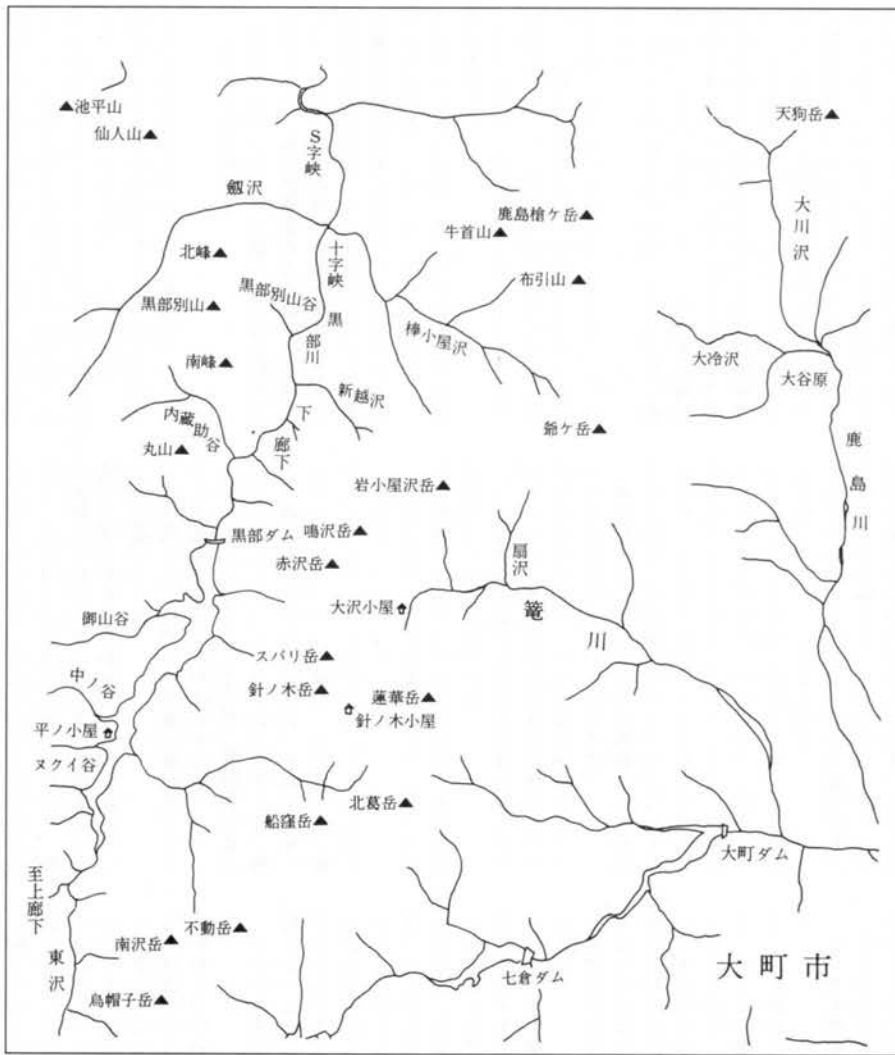
寿美よしさんは、それからいつでも買ってくれたですよ。そのころはね、まだ混乱しているから大町まで生魚とか、塩魚売りに来る人が少なかつたですよ。だから料理屋には、いつでも一匹でも二匹でもいいから持って来てくれと言われて、気楽になつたつていうか、商売にしてもいいかなという気にもなつたです。よその料理屋にも持つてみたが、やっぱり買つてくれたですよ。

黒部入谷

何年かやるうちに、釣り友達も相当できてね、そのうちに黒部へ行つてみんかという話



平の小屋(現在)



黒部周辺概略図

が出た。二十三年の七月ですよ。同級生と二人で一週間ぐらいの予定で初めて黒部へ入ったんですよ。

ルートは、大出（現大町市平大出）までバスで行ってね、後はとにかく歩き通してその日は大沢泊まり。翌朝早く針ノ木峠越え。寝具から何から一週間分背負っているから、三十キロぐらいはあった。三時間登って峠、それから針ノ木谷を四時間半下って黒部川の平ですわ。平には小屋があつたんだが、小

屋には人が居て泊まり賃取ると思ってたんですよ、野宿しようやとて平から五百メートルくらい下った河原で野宿した。

翌日本流を釣りに行くことになり、御山谷という立山から出ている沢があるんですが、そこに、日電（日本電力）の小屋っていうのがあった。建てたのは昭和七年ころだといふけれど、平との間にあった道も私たちが行った時には荒れててね、道なんて形はひとつもなかった。釣って行って、片方が悪くて通れ

なくなれば遠浅の所を見つけて何度も渡り返してね。

小屋に三日くらい泊まったでしょうかね。相当釣ったが、処理の仕方を知らなかったんですよ。ただ焼けばいい、焼いて、囲炉裏の上の棚みたいなのに乗るときはいくらに思っていた。ところが、大町に持って帰ったら全部腐っていて食えなかった。

これは難しいもんだと、黒部で魚釣って大町へ持って来れば売れるんですがね、どうやって持って来るかすごく悩みましたよ。まあ昨日釣って今日持って来たやつならなんとか食えましたがね。それで兄貴たち

に聞いたら、塩を混ぜたコヌカの中に入れて来りゃいいという話で、二十三年の八月のお盆に半生のコヌカを持って、今度は一人で黒部へ行ったんですよ。

大出の出の富士弥さんは、冬はカモシカ猟をやつとって、兄貴が毛皮なんか買つとったからね、私も富士弥さんの名は知ってた。それで私が学生のころ、昭和七年に針ノ木越えて立山登山した時にね富士弥さんの小屋へ泊めてもらったことがあつたんですよ。だからね、人の言う話と違って、とてもおとなしい人だ、いい人だという印象が先にあつた。もちろん私たちは子供だったし、あの人は大人で、川向こうに平の小屋はあつたけど、こっち側（信州側）に富士弥さんの小屋あつたもんで、じゃあここへ泊めてもらえやというところで、頼んだら「おおいよ泊まってくれ」って仲間四人で泊めてもらったわけですよ。

まあそういうこともあつたもんで、大町のことだ話してたら、一緒に組んで釣りやらんか、ということになった。当時富士弥さんは六十一歳ぐらいだったけど、こつちとしてはケンカするよりはいいからね。よしと、一

富士弥さんとの出会い

七月に行つて様子は分かってから、釣らないうで平から直に御山谷の小屋へ行つたんですよ。したらね、四、五人いるんですよ、小屋に。いろいろ話ししたらね「こんなところ来たつて泊めねぞつて、小屋の親父が怒つてた。どうすりゃいいだか、これでへえ帰らつて思つてる」つて言う。その親父が遠山富士弥さんだったわけ。

そんなばかなことはないと小屋に入つてみたん

緒にやりや効率がいいじゃないかと話がまとまった。あの人はもう幾日米とったかね、三升ばかり米出し合ってやろうと話をし出してきたが、私は四升か五升持って来てたんで、一緒にやるなら米を全部合わせて、食べるだけ二人でやろうって言ったたら、喜んで。

#### イワナを焼き枯らす

釣ることはできるけど他のことは全然知らないんだね、魚の処理法なんかは。まず串でしよ。三十七センチの魚だったら串は六十七センチはいるんだよね。うんと長いんですよ。囲炉裏の灰に刺す刺し代だって十五センチぐらいいるからね。それくらい長さの串がちょうどいいわけですよ。大小みんなそれでおさまるわけだし。

イワナははらわたは出しているから、口から通してね、しっぽの肉のあるところだけにきゅっと刺すんですよ。その刺さる分だけ串の先を細く削つとけば後は太くても何でもいいわけだ。

はらわたの出し方だがね、あの人はね、肥後守<sup>ウツク</sup>ってやつあるじゃない、鉛筆削る時使う切れ味がいい小刀。富士弥さんはあれで肛門からスーッと喉元まで切つてね、親指をつつこんで簡単に出しちゃうんですよ。「おやっ、親指どこに突っ込むだ」て聞いたら、「胃袋の下へつつこみゃあいいんだ」。食道やエラがくつついてるところを親指の先でちぎれつついことなんだがね、初めてだからなかなか取れないの。途中で切れちゃうんですよ。

はらわたは捨てない。食道があつて、胃袋が曲がつて、魚の胃袋の曲がったところ、この刃を入れると、つまってる食べた餌が全部ころんと出るんですよ。それを出しておいてどうするかというと、火棚の下にぶら下げた缶カラがあつて、ここへ塩水を入れてガーッと煮てきたら、そこへはらわたをこそつ

と入れるんですよ。そして魚焼く串でかき回して、次にワーツと煮え立ったら外して、笹の皮編んで作ったスノコの上に全部並べて火棚へ上げておく。下からずつと火を焚いていけるから乾いてくる。

富士弥さんと出会った最初の晩にそういうことを見せてもらったわけですよ。

夕べ干したはらわたはね、翌朝食べると

「しこらしこら」してうまいんですよ。海の貝の干したやつみたいでね。それと「ゆ」っていうやつ、苦い胆嚢ね、あれも全部一緒なんですよ。あれは腹の薬にもなるんですよ。消化にいいんですよ。

今度は焼き。海背川腹ついでにね、川の魚は腹側から焼けて言うからね、火に腹向けて並べていくんですよ。

このときね、腹びれは交互に体を抱くようにくつつけ、残りのひれはみんな体にくつつけちゃうんですよ。そうすると製品になつてからうんと見たとこいいんですよ。

あぶりはじめて少したつと魚体に粘りが出てくるから、その時ひれをくつつけちゃうわけですよ。どんと火が燃えてるからね、ついでそのチャンスはずしちゃう。まだいいと思つていっちゃうにもくつつかない、乾いちゃうね。また水や唾で濡らしてヌルヌルを出してね、またくつつけるんだよ。

頭が下向いてるでしょ、だから最初はどうとど水が滴り落ちる。この水がね、垂れきれば濃い脂みたいなのが鼻先に溜まって落ちなくなるんですよ。これが腹の焼き終わらせ。今度はひっくり返して背中を焼く。これでだいたい火が通るから、後は火棚に乗せて乾かすんですよ。

火棚はねズコの薄板でできてね、一メートルの一・三メートルくらいの大きさに三段になつてた。焼けたら一番下の段に並べるんですよ。翌日は二段目にかけてく式で、三段目に持つていくころになりやもう相当乾いちゃうんですよ。

胸びれの上、頭の後ろが一番肉が厚いから、富士弥さんはそこを押してみるんですよ。へこまならいい、へこんだらまだ乾いていないからダメなんです。棚へ上げて、そこがへこまなくなつたら、下ろしてみんなかためておけばいいんですよ。ガラガラやってもね、ヒレがくつついてるからクスでないんですよ。

イワナの体はね、煙で干されているから金色になつていんですよ。これで製品のでき上がりなんです。よく干さないで売りに行って買う方が知つて、「魚屋さん、出来が悪い」と言われる。生乾きのイワナをいっぺん買った人はもう買わない。カビがふいちやうわけだよ。私らのはもう買わない。ちやんとした缶カラに入れておけば翌年でもカビふかない。土産物屋なんかはね、次の夏にまた出しても売れるんですよ。製品に対する信用が大切なんですよ。

薪は皮のむけた流木。まあ近くに流木がなくなつてくるとハンノキを切つて使つたがね。柳や唐松なんかちよつとは混ざつていたかな。柳は煙りが黒くなつてダメだしね、唐松も煙は黒いし、跳ねる。唐松には脂袋があつて、パンツ一枚で焼いてるでしょ、ビーン、ビーンと跳ねて熱いんですよ。

#### イワナを売る

そうやって二週間ぐらい一緒に釣つたじゃないですか。四升の米も食い延ばしすれば、ただけ儲けにつながる。歴然としていんですよ。一日で二百匹は釣るんだからね、一匹四十円くらいで売れたから二百匹釣らや八千円ですよ、大きいですよ。どうしても金勘定になるからね。米を切りつめようと、ろくに飯を食つてないから、終いには岸辺で砂に埋まった足を抜くにも、よいしょってやらなきゃ上がれないんですよ。

さて、大町へ帰つてきてどうするかについてたらね、富士弥さんが売りに行くぞつてわ

けた。南安曇の白湯温泉から、上高地へね。富士弥さんは三俣蓮華の小屋にいてね、山賊ついでにわれたこともあるんですよ。葉師岳の方の黒部の源流でイワナ釣つて、上高地へ何年か売つとつたらいいんですよ。だから売り先を知つて、行けば顔なじみでね。白骨の新宅へ寄ると、亭主がね「魚屋さん、よく来てくれた」と、買つてくれるんですよ。それから今日はうちに泊まつてつてくれますかね。つて聞かれてね、宿屋はタダなんですよ。魚買つてくれてタダで泊めてくれて、あんな配給時代に酒まで出してくれたんですよ。白骨はね新宅と本家の二件しかなかったけど、本家もやっぱり親切にしてくれましたね。

それから今度は上高地ですよ。五千尺旅館があるが、富士弥さんは「まあここは買わねえよ、漁師を雇つて生でお客さんに買っているから薫製は使わない」と。上高地で出たのは温泉旅館。ここは買つたですよ。その若い店長みたいな人を知つてね、そこにも泊まつた。帰りは中ノ湯とかの温泉に寄つて、だいたいみんな売つちやつたんですよ。

富士弥さんには子供があるのにね、どうして私に売り先まで教えてくれたかね。あの人はもう一年か二年やりやあ終わりだつていう限界を知つててそうしたかね。なにしろ普通、商売先までは教えないですよ。

富士弥さんとの出会いはね、私には運が良かったんだね。富士弥さんがいるつてこと知らなくて御山谷へ行つて、たまたまそこにおいた人が富士弥さんでね、一緒に組んだおかげにイワナの処理から売り方まで全部教わつたわけですよ。いい人に行き会ふことができた。私の一番の生活の恩人ですよ。

#### 岩小屋生活、そして黒部との別れ

まあこんなことでつと釣つてきたわけですよ。あれは一人で始めた次の年、昭和二十六年六月のことです。御山谷の小屋に着い

たら、ドヤドヤッと関西電力の測量の連中が来てね、「出ててくれりよ」と言われた。「出てけつたつて、おまえたちは何者だ」と聞いた。「関西電力だ」と。「関電にこの小屋を使う権利は無いじゃないか」。そしたら小屋は営林署のもんでね、新しいダム(黒四)作るための測量に営林署から借りて来たと言うんだ。「部屋はいくつもあるから、いるならいい、だがこっちは大勢だであんたも困るだろう」と言われた。

こりゃいかんと。富士弥さんから何かの拍子に、御山谷の下流にいい岩屋があるって聞いていたのを思い出して、探してみた。御山谷の沢を渡って川端歩いてくと、四メートルか五メートルのちよつとした土手があったんですよ。そこへ上がつてみたら、大きな岩が見えてその下が空いてた。ああこのことだなと思つたね。

何でも小屋のもの持つてけつて言うんでね、畳二枚入に背負わせてね、もらつてきて、鉄棒があつたもんでね、それで中のゴロゴロしてる岩をみんな出して四畳半くらいの部屋にしたんですよ。カーバイトの空き缶で、入り口の屋根葺いて、戸口にムシロを吊した。ところができ上がった次の日に雨降つてね、水が岩伝つて漏つてきて、せつかく乾かした魚がびしょ濡れになつてた。岩小屋つてものはダメなもんだね。これをどうやって防ぐか骨折つたですよ。火を焚いて岩が乾燥してきたらずつと毎日焚くんです。これで少々の雨なら濡れなくなつた。

こんなとこじゃ儲けにならねえわなと思つたですが、仕方ないですよ。一人のことだから、気分がつてくればいいんだが、最初の五日くらいは嫌だ嫌だ、帰ろう帰ろうと思うですよ。米もあつたし、麹も持つてつたんで、小屋の桶持ち出して、濁酒造つて一人で飲んでつたですよ。いい具合にできてね。それで気持ち紛らしてね。でもそのうちに慣れてきて、今度は釣るのが面白くなって、もう

鼻歌混じりで毎日が過ぎていく。

私が落ち込んでる時に、測量の連中は私が釣つて後先で勝手勝手に釣るでしよ、まあ嫌だくなつちやつてね。「俺は商売でやつてるんだから、邪魔するな、下手に俺の邪魔すりゃ後らから突き落とすでな」と脅しあげた。二十人くらいいたのにな。

連中は釣り落としも多いんですよ。お前たち釣つてどうするだ、焼いて食うだかつて聞いたら、いや食つたり食わなんだりだつて言う。何でもいいわ一匹十円で買うから持つてこいつてことになつた。

現金は持つていたんですよ。ダム調査に来た東京のインテリの連中が、土産にするから売つてくれつて言うから、目一杯ふつかけて売つてやつた。その銭が五千円あつたんですよ。そういうこともやつたんですよ。

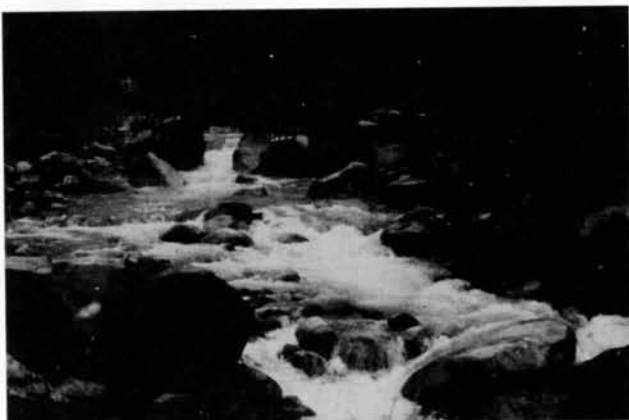
結局ね、もうそんな連中がいればね、何してもかにしても邪魔されちやつてダメだつた。これももう黒部の釣りのダメだと思つた。

次の年もね、嫌々行つたら、私の作つた岩小屋は焼かれちやつてたんですよ。富山のやつに。平の小屋には佐伯寛さんがおつたしね、出直して黒部の東沢に行くことにしたんです。東沢にはこの年何回も行つたんですよ。

その度に残つた米を敷き皮へ入れてね、雨雪入らないように蓋をして、木の高いところにぶら下げておいたんだが、なんともなかつたね。あの辺は雪深いから相当高いところにぶら下げないと、埋まつちやう。雪に埋まると水吸い上げちやうからね。東沢は二十八年、二十九年もやつたけど、あまり良くなかつたね。

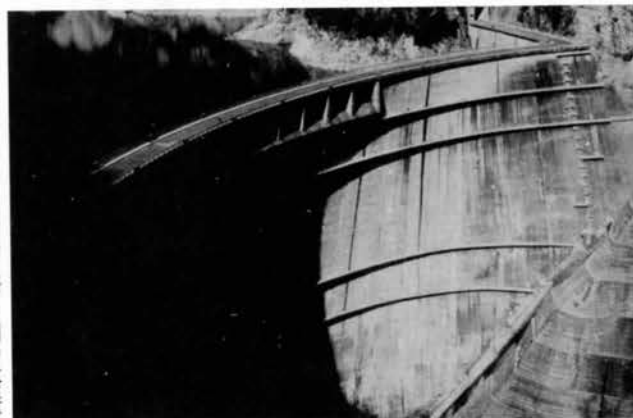
それから、三十一年か二年ころだつたか、「白い山脈」つていう映画撮りに来た連中がね、クマやキツネなんかのね口ケをすつて言うんでね、黒部の案内も兼ねて動物の扱いの係りをやつたこともありました。

その間にもね、黒四ダムの工事が進んでイワナも釣れなくなつたもんだから、関電に補



東沢

償しろつて言つたんですよ。関電に呼ばれて行つて、どんな製品だつて聞くもんでね、東沢で釣つたイワナを二貫目(七・五キログラム)持ち込んでね、これで六千円だつて言つた。そしたらそんなもの高いつて言つたね。高いつて、みんな売れたんだよ、これ六千円で売れて年間十八万円だつたら、向こう二十年で三百六十万円だが、あんたたち補償してくるかつてまでは言つたけど、はつきり強くは言えなんだ。その時ね、内容証明で郵送するからしてね、文書で三百六十万円補償しろ、ダメならダムができたならダム湖に船浮かべて勝手に釣るぞ、くらいなこと言つたら、乗つてきたと思ふんだがね。なかなかできなんだ。結局、「うちに来て勤めてくれれば食べられるだろう。どうだ」と関電に言われて、行くよになつちやつたですよ、ダムができた三十五年まで三年はかしね。その後、黒三(黒部川第三発電所)で仕事があると言われたが



黒部ダム

ね、ちよつどそのころ、昔私が中国の大連でやつた船の仕事の口が横浜にあつて、声がかつたんですよ。外国の貨物を扱う特殊な仕事なんでね、要領を知らなけりや扱えないんですよ。

東沢で山小屋やろうかつて気持ちもあつたでね、家族会議開いたら三対一で否決せ。みんな横浜行つた方がいいてわけだ。それで行つちやつたんですよ。三十五年に横浜行つて、もうそれで黒部とは縁が切れちやつたんですよ。

定年なつてからね、大町に帰つてきて暮らす様になつたですがね。(つづく)

#### 訂正とお詫び

第42巻1号に掲載されました表紙文章の著者の氏名に誤りがありました。高橋龍之助氏に訂正させて頂くとともに、お詫びします。

## 里におりたライチヨウ

宮野典夫

ライチヨウは中部山岳の高山帯に生息し、渡りと呼ばれるような遠距離の移動はみられない鳥である。厳しい冬も高山で過ごす、冬の生活は解明されていない部分が多く、夏と変わらない地域で冬を越す個体群がある一方、夏の生息地域を離れて冬を越す個体群など、エサとなる植物などの環境によって生活の場所を変えているようである。

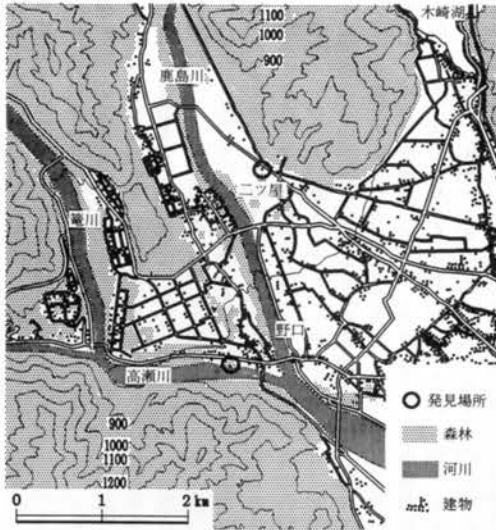
大町山岳博物館には標高一〇〇〇メートル以下でライチヨウが発見された記録が二例あり、その事例をここに述べる。

一九六六（昭和四一）年一月三日に大町市平二ツ屋（標高八二五メートル）でライチヨウが発見された記録がある。長野県教育委員会へ報告された内容はおおむね次のようである。

『発見者は長沢信氏で、ネコが鳥をくわえてきたが、鳥の名前もわからず、数日保存しておいたがライチヨウらしいということで、大町山岳博物館に届けられた。』

この鳥はオスのライチヨウで、囊内にはホワイトクローバー、イブキジャコウソウ、ハインツツゲなどの葉といった平地産の植物がみられた。このことから近くの鹿島川の河川または付近の原野で、ある期間生活したと思われる。

一九八八（昭和六三）年三月一七日に大町市平野口（標高七八〇メートル）でライチヨウが発見された。発見者は宮坂幸男氏と高橋利雄氏で、一〇時ごろカラマツの根元にいるところを発見し、博物館に連絡をした。この場所は南北に約五〇m、東西に約二五〇mの



樹高二〇mくらいのカラマツとアカマツの林で、南面は高瀬川の河川となっていて約三〇〇m先は桑の峰（標高一六二三m）から延びる尾根がせまっている。北、西、東面は水田と畑があり林から北へ二五〇mのところには県道があり人家が点在している。

午後から雪が降り始め、葉や枝



アカマツの枝で休むライチヨウ(1988年3月17日)

に積もった雪が白いライチヨウとの区別を困難にさせ、移動の際たびたび見失うこともあった。

一四時四〇分から一八時までの六時間三分の間に四回の移動が確認できた。ところが一八時から頻りにマツ間の移動がみられ、一八時一五分に比較的密になっているアカマツの枝の中に姿を消し、その日は確認できないまま、一八時四五分に観察を打ち切った。この時間帯はライチヨウの日課の中ではネヤイリのころであり、野生ライチヨウ、あるいは飼育下のライチヨウでは飛翔する行動がよくみられる。ちなみに同時期の飼育下でのネヤイリは天候にもよるが一八時二〇分ころである。

翌朝五時三〇分頃から調査を開始したが、ライチヨウの姿、声の確認はできなかった。二例の里におりたライチヨウは共にオスの個体であり、ライチヨウの社会構造が大きく変化する時期である。

一月はそれまでのメスとヒナという家族



ライチヨウが発見された林(1988年3月18日)

単位が崩壊し、オスとメスの群、オスの群、単独の個体などのグループが形成され、冬を迎えるころである。

二月中旬はオス間の対峙や威嚇が見られる前である。対峙や威嚇はやがてオス同士の追いかげや争いに発展し、あるエリアの順位が決定され、ナワバリが形成されるのである。残念ながらライチヨウの冬の生活がまだ十分に解明されていないので、これらの事例が何を意味するものなのかよくわからない。しかし、ライチヨウのまだ知られていない生活の一部分をみる事ができた。

(大町山岳博物館学芸員)

山と博物館第42巻第2号

発行 一九九七年二月二十五日発行  
〒388長野県大町市大字大町八〇五六―一  
大町山岳博物館

TEL 〇二六―一三二一〇二二

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号 〇五西 〇一七 三三九三